

3 江戸時代の看護書『病家須知』の

著者平野重誠の背景——家系を中心に

中村¹⁾ 節子・平尾真智子²⁾

江戸時代後期に現代の予防医学や看護にも通じる『病家須知』を著した町医、平野重誠の背景はこれまで明確にされていなかった。その平野重誠の個人史に関する新たな資料を得たので平野家の家系を中心に報告する。

今回得られた史料は安西安周による「平野革谿の事蹟（寛政二年—慶応三年 二四五〇—二五二七）」〔中外医事新報〕、第一二八六号、昭和一五年〕と平野本家子孫で埼玉県にご在住の平野鎮雄氏所蔵による『平野家家系図』と『先代記』である。

平野重誠は一七九〇（寛政二、月日は不明）年江戸両国に生まれ、一八六七（慶応三）年一月一六日、七八歳で亡くなっている。名前は重誠、字は子公・誠之。通称は元良・元亮・玄良という。別名として革谿の他に革

谿道人・一夢道人・指漏漁者・櫻寧・櫻寧室主人・真観舎・無適道人・黙翁等があり、その居室の名は扱善居・洗心庵・無適庵等である。

家系は「美濃の望平野冠者源の重秀より出づ。故に平野氏を以て氏とす。子孫南海に徙り世伊予の著族となる。諱は重安に及び庶孽を以て出でて阿濃津国主に仕う。其季子諱は重栄、少より幕府に入り以て家を起す」〔平野革谿の事蹟〕六九頁〕とあるように曾祖父（九太夫重久）は伊勢安濃津の武家であったが、祖父（重栄）から医家となり、父（重良）・重誠・子の元周（五代婿養子）までで医家は終っている。重誠は三人兄弟の長男で二人の弟、重猷・重敦とも医者である。平野本家を引き継いだのは重良の三男、重敦（通称元敬）で、その子孫（九代目鎮雄氏）は現在、埼玉県に住んでおられる。重誠の子孫は六代目以降は不明である。本家を継いだ元敬の住居は江戸切絵図（嘉永三年）の薬研堀（村松町）に記されている。重誠も村松町に住んでいたようである〔平野革谿の事蹟〕七一頁〕。

祖父（重栄）が医者になられた経緯は以下のようにあ

る。(平野本家七代目誠一郎氏による「先代記」より要約) 年僅か十二歳の頃、伊勢のような片田舎にいるよりは大江戸へ行って立派に出世しろとの父九太夫の願いの他に何か仔細でもあったらしい。父の手紙を持って、江戸室町の会津屋という塗物問屋に小僧で住込み、客人等の脚半やわらじを洗濯したり、商売になれてくると諸大名方より注文の品を届ける役などをしていた。ある時小笠原家へ注文の品を届けにいき、返事を待っている間に下郎だか仲間だかに小僧邪魔だから出ろと云われ土足で足蹴りにされたことが悔しくて夜も寝れない。元は武家の生まれである。商人になればこそ足軽どもに蹴られても口返しもできない。なんとか木っ葉侍を見返してやりたいたと医者になることを決心。行燈の火影で独学。その後、主家会津屋は破産。他の奉公は考えず医者になる気だから小伝馬町の家に帰り、按摩を業としながら医者の研究を続けた。その頃は開業免許も何もいらぬ。病人が治りさえすればよいので、永年苦学功なり医者になった。

父(重良)は次男で、祖父の業を引継ぎ杉田玄白とも

交際があり、多紀桂山に従って方薬を学んでいる。また、各大名へも出入りしていた。父の頃から家道が裕かになったようである。

重誠は幼少の頃から父の手伝いをし、その後家業を引継ぐ。医者をしながらも儒佛両道の研究に深く心を寄せ、上の弟(重猷)に家業を譲り、自分は人道に関する著述などをした。妻(桂)との間に一男二女をもうけるが、長男は亡くなり長女が家業を継いでいる。弟(重猷)も兄の後を継いだものの心学に熱心で、下の弟、元敬が家業を相続している。元敬は日本橋区村松町に住み、医業を営み八十六歳で亡くなっている。

重誠の霊は現在東京南品川にある天妙国寺(日蓮宗の名刹)に眠っている。

(看護史研究会)

(東京慈恵会医科大学)²⁾